令和３年８月９日　第 ９ 号

かわら版　育種の波動

全国新品種育成者の会発行

秋の講演会の講師が決定、
育種賞選考委員3名、新入会者2名等を承認

本年2回目の役員会を開催

本年下半期の活動等を検討する役員会が、8月4日役員、顧問、育種賞選考委員の 13 名が参加し、オンラインで開催されました。

山田会長代行の挨拶、PVP コンソーシアム運営委員会、植物品種保護戦略フォーラム企画委員会等の報告の後、秋に実施する講演会の内容等について、活発な検討が行われました。講演会については、育種賞・育種功労賞受賞者の中から、山形県でスモモの育種に取り組む渡辺誠一さんを講師として、会員以外からも参加者を募り、10 月下旬にオンライン開催することを決定しました。育種賞・育種功労賞の受賞者を選定する選考委員に、新たに日本花き卸売市場協会会長の福永哲也さん、昨年の総会後の講演会の講師をされた竹下大学さん、福井農林水産省知的財産課長が就任すること、前回の役員会で設置が決まった会の品種登録制度等の検討委員会の委員を相談役、顧問、役員等から選んだ 6 名とすること等が承認されました。さらに、本年 JATAFF が作成する流通品種データベース（当会では奥さんがワーキング G に入る）については、登録品種以外の流通品種情報も得られるものとなることから、品種情報の収集依頼がまもなくある（期限は 10 月末の予定）ので、会員への協力をお願いすることが確認されました。

なお、**講演会については、**役員会終了後に関係者と話した結果、**10 月 20 日（水）の 15 時から開催**することを決定しました。

✇語句説明

＊PVP コンソーシアム：植物品種海外防止対策コンソーシアムという。農水省の植物品種等海外流失防止対策事業を JATAFF（農林水産・食品産業技術振興協会）が事務局となり、日本種苗協会、日本果樹種苗協会、全国食用きのこ種菌協会、種苗管理センターが共同連帯して実地するための設置されている。当会は、任意団体のため構成団体になっていないが、個人育種家の団体として参加している。

＊植物品種保護戦略フォーラム：植物品種の保護のために侵害対応を強化するために設置され、企業、団体、県、個人等、植物品種保護に賛同する者が加入しており、当会の代表が企画委員を務めている。

育種賞・育種功労賞の選考委員新メンバー

候補者の中から受賞者を決定する選考委員を長年務めてこられた小林五郎さん（元全国普及協会会長）、松田さん（茨木大学名医教授）、尾崎さん（農水省知的財産課長）に代わる3名が委員になったことにより、選考委員は次の7名となりました。

福井逸人（農水省知的財産課長）、福井博一（岐阜大学副学長）、三野耕治（元農水省知的財産課長）、福永哲也（日本花き卸売市場協会会長）、竹下大学（All-America Selections ブリーダーズカップ初代受賞者、技術士（農業部門））、野村和成（元日本大学教授）、佐藤和規（ビスタ・エフ・エフ代表）

各人の感性で多様な品種を生む個人育種家

林副会長、果樹の育種等について語る

山陽新聞（7/11）に掲載

山陽新聞に岡山市でブドウを育種に取り組む林慎悟さん（当会副会長）が育種の必要性、育種の苦労、個人育種家の役割、育種家が収益を得られない現状、ユーチューブを用いて5月から始めた「日常を豊かにする果物のおいしい話」の生ライブ配信の活動について語った内容が、1面と4面に掲載されました。林さんは記事の中で、「個人育種家は各々の感性で新品種を追求することができ、それによって品種の多様化が生まれる。登録品種権を持つ育種家の多くは70．80代で、若い世代を後を引き継いでいかなければならない」と述べる一方、品種開発にかかるコスト回収ができない現状に危機感を持っていると主張しています。我が国育成の新品種の海外流失を防ごうと成立した改正種苗法が施行されたこの時期に、タイムリーな記事となりました（山陽新聞記事を読みたい方は事務局に連絡ください）。

☘新規加入者紹介☘

この度、次の2名が新たに入会されました。
吉池貞蔵（岩手県花巻市、リンドウ、バラの育種）
木村奏（神奈川県横浜市、上智大学理工学部在学中）

わたしの育種奮闘記

この記事は本人から聞いた内容を、本人の話し言葉で作成しています

シクラメン プラチナリーフの育成と生産性が高く花付きが良いクレマチスの育成に取り組む

□ 長谷川康平さん： 茨城県北茨城市でシクラメン、クレマチス、クリスマ　スローズを中心に生産している

花き農家 長谷川園芸の長谷川康平です。福島県いわき市に隣接する北茨城市は茨城県東北端に位置し、気候は夏涼しく 冬も強い冷え込みが少ない地域です。

主にシクラメンの栽培をしていた花き農家で育ち、花の栽培を常に見て過ごしてきました。日常的に農業を手伝ってはいたものの、特に家業を継ごうという気持ちは持っていませんでしたが、国際農業者交流協会のアメリカ派遣研修の存在を知り、高校卒業後にその研修に参加することにしました。研修期間は約2年間、 トータル6ヶ月の学科研修と実地研修を受講するというプログラムで、私の場合はオレゴン州で3か月、ロサンゼルスで1年半の実地研修を受けました。研修中ロサンゼルスの農場主と作業を共にする中で 植物に触れる楽しさとやりがいを感じ、将来的に花に携わる仕事をしたいという思いを強く持ちました。このナーセリーで花の生産・流通・販売の流れ全てを学ぶことができた経験はとても大きく、花き農家として働く上での礎となっています。

研修を終え21歳で帰国した私は、花の仕事を生業とすることを決めてはいましたが、その前に視野を広げておきたいとの気持ちから、法政大学文学部地理学科に入学しました。在学中は地理について楽しみながら多角的に学んだだけでなく、花き市場でアルバイトも経験しました。花き流通の一連の流れを把握することもでき、とても有意義な時間となりました。このような経験を経て、在学中の2004年26歳の時に就農しました。

シクラメンを生産していた父は 育種はしていませんでしたが、品種を維持するために種採りをしていました。私が就農する前年に、系統別に採種していたシクラメンの中から突然変異による完全なシルバーリーフシクラメンを発見しており、それを見た私は、とても美しく珍しい葉を持つこの品種を より良い形で世に送り出したいとの強い思いに駆られました。そこで早速シルバーリーフシクラメンの育種に取り掛かることにしました。育種は未経験ながらも父や地域にいたシクラメンの育種家から学び、試行錯誤しながら育種を続けていきました。

根気よく取り組みを続けた結果、2008年に「シルバークラブパープル」、2013年に「シルバークラブバイオレット」、2016年には「シルバークラブレッド」の3品種の品種登録をすることができました。更に、完全シルバーリーフ品種の総称として名付けた「プラチナリーフ」の名称は、2009年に商標登録が認められました。プラチナリーフシリーズの品種は、葉の美しさだけでなく、耐暑性と耐寒性を併せ持ち、花粉が出にくいことから花が長持ちするのも特長です。

同じく、主軸として栽培していたクレマチスは 古い品種の取り扱いがほとんどでした。実際就農してみて、同系統でも品種に癖があり、同じように管理をしてもバラつきが出ることに気づきました。そこで私は、管理によるバラつきが少なく 均一の品質を保つことができる品種を作りたいと思い、クレマチスの育種も始めることにしました。クレマチスは周辺に育種家がいなかった為、完全に独学での育種でした。まず、種を蒔き、他のクレマチスと同じ管理で育成して個々の特性を把握することから始めました。多種多様なものが出てきた中から、花付きの良さはもちろん、旧枝への花芽の付き方や、旧枝から伸びて花が咲く高さが同等となるようにと、独自の基準を設定し、選りすぐった品種の固定を目指しました。

このようにしてクレマチスの育種を行った結果、2009年に「北浜」、「阿吹」、「仁井田」、2013年に「富士ケ丘」の品種登録をすることができました。「花園」、「華川」の2品種は現在出願中です。これらの品種は、目標としていた同じ管理で生育にバラつきが少なく製品率が高いという特長に加え、生育旺盛で花付きが良い品種として作出することができました。

シクラメン「プイラチナリーフレット」

クレマチス 「華川」

ここに至るまでには 思うように行かなかった面も多くありましたが、その甲斐あってか、これまで育種してきた全登録品種が各博覧会で入賞を果たすことができました。シクラメンでは、「プラチナリーフレッド」がジャパンフラワーセレクションのカラークリエイト特別賞他多くの賞を受賞、クレマチスでは、「北浜」がフェンロー国際園芸博覧会の中庭・屋外の鉢物部門で1席を、最も新しい育種品種である「華川」はジャパンフラワーセレクションのベストフラワー賞を始めとする3つの賞を受賞することができました。自分が育種した品種が形となり評価されたことは、大変喜ばしく、光栄なことだと思っています。

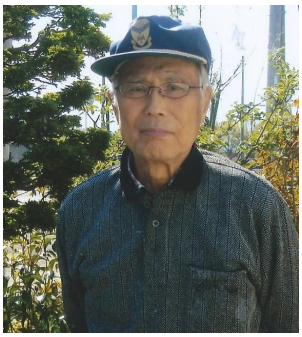
現在は、市場経由で園芸店が販売するという流通経路に加え、ネットショップでの直売も始めました。普及を進めるため、SNS を利用したアピールにも力を注いでいます。これまで培ってきた経験に基づき 自ら育種した品種を独自にブランド化することで、徐々に経営の安定にも繋げられるようになってきました。

育種には時間もかかりますし 大変な面も多々ありますが、誰よりも早く新しい花に出会えることは、育種家ならではの特権だと思っています。また、苦労して作った品種が多くの人に広まり、植物それぞれの良さが認知されていくことはこの上ない喜びです。徐々に増えつつある直売ではオリジナル品種を手にしたお客様から直接お喜びの声を伺える機会も多く、さらなるやりがいも得られました。

今後の展望としては、母の日ギフト商品をメインに作っているクレマチスが、近年の春先の気温上昇により開花調整の難しさを感じることが多いので、それに対応できるような遅咲きの品種を育成していきたいと考えています。花のある生活が浸透しつつある今、自分が育成した植物でお客様に元気や癒しをお届けできることに、深い意義を感じています。植物を通じて、植物を育て楽しむ生活もお届けできるよう邁進していきたいと考えています。

青いバラを目標に、86 歳の今も父が植えた「ブルームーン」にブルームーンの実生の交配を続ける

渡部泰蔵: みちのくの冬の風物詩となった「かまくら」、B 級グルメの「横手焼きそば」で知られる秋田県東南部の横手市に住む渡部泰蔵です。今年 86 歳となりましたが、バラ、サギソウ、山野草の斑入り種の品種改良に挑戦していて、事務局の岩澤さんから育成者の会のことを聞き、昨年入会しました。父は稲や野菜の生産農家でしたが、趣味でバラやリンゴの育種に取り組んでいました。小さい時から植物が好きだった私は、小・中学校の時には先生に栽培の仕方や育種のやり方等を聞いたりしていました。父は、40 年前に亡くなりましたが、その頃から芽接ぎや交配の仕方等のアドバイスをしてくれた父には感謝しています。



秋田市にあるノースアジア大学に入学し、汽車通学を行っていた頃、秋田市のデパートで行われたバラの展示会を見てバラが好きになり、卒業後秋田バラ会に入会して展示会に出品し、県知事賞等、多くの賞を受賞しました。私は、農家ではありません。7 人兄弟の 6 番目でしたし、大学卒業後は公務員となり、県庁に 4～5 年務めた後は地元横手市役所の職員となりました。出品したバラが展示会で入賞されるようになった頃から、私は育種に興味を持ち始め、父の作業を夜中にノートに書き留めて参考にしたりしました。

私のバラの育種は、50 年程前に父が垣根の所に植えた「ブルームーン」を母木としています。このバラは、白に鼠色が入る花で、色はぱっとしませんが、匂いが良いのが特徴です。このブルームーンと交配には、芽接ぎして採種した種子を播いたブルームーンの実生苗木を用いています。育成までには、約 10 年がかかっています。できた花は雨にあたると縮んだりする花弁の弱いものが多く、良いものは得るのは容易ではありません。私の目標は青いバラを育成することです。それに近づけるために、葉の青い物を選んで交配するようにしています。特に、葉の裏が青くないと、青いものを作ることは困難です。

長年育種した結果、昨年にようやく濃いラベンダー色の剣弁高芯咲きで、花茎も長く伸び、花持ちの良い新品種「秋田おばこ」を登録申請することができました。

バラ　「秋田おばこ」

サギソウは良く増える植物で、球根が数倍に増えると突然変異がが出ることがあります。これまで、黄葉の「黄金宝」と、白い中斑が入る葉の「麗光」の2品種を出願申請しました。サギソウの出願はこれまで誰もしていなかったとのことで、農水省の審査官が我が家に審査基準を作るための調査に来てくれました。このうち、「麗光」は葉に花が咲いたようにきれいで、雑誌「趣味の山野草」に紹介されたことから見学に来る人も多かったのですが、盗難にあって1夜のうちに全てを盗まれてしまいました。その夜は雹が降る悪天候だったので目撃者はおらず、警察に届けましたが解決にはいたっていません。

サギソウは良く増えるので、東日本大震災で仮設住宅に入った被災者に贈ってあげようと、平成 25 年

にNPOを作って市役所時代の仲間など50～60人に10球を植えた鉢を1人10鉢栽培してもらい、1,408球を岩手県釜石市に寄贈しました（かわら版「育種の波動」2号に掲載）。

交配して作りだした品種は、たとえ出来損ないのようなものでも、孫子のようにかわいいものです。サギソウは、「黄金宝」と青い葉のものの2種類を作っていますが、バラについては今後も父が残してくれた「ブルームーン」を母木として父木となるバラを選んで、育種を楽しんでいこうと思っています。

コンパクトで花茎が長く、卓上でも楽しめるパンジーをめざして

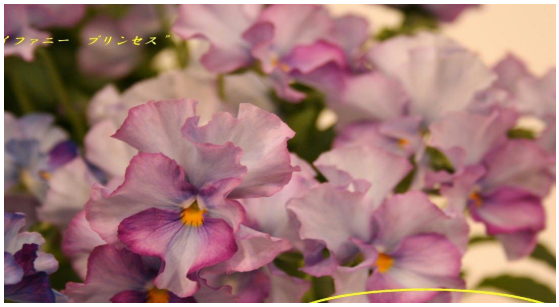
□ **笈川勝之：** 神奈川県の県庁所在地、日本有数の港湾・商工業都市である横浜市の北東部に位置する港北区のフラワーファーム都筑の里の笈川勝之です。花き栽培農家に育ち、東京農業大学で学び卒業した昭和58年、23歳で我が家の仕事に就き、両親と一緒に花きの生産に入りました。父があまり体が丈夫ではなかったので、外で数年間の研修を受けることはしませんでした。

父は主にシクラメンの栽培をしていましたが、私はパンジー、ビオラ、ニチニチソウ、ポットカーネーション等の花苗生産並行していき、市場向けに出荷していました。それを自分の庭に植えていると、こぼれ種子でも変わった面白いパンジーが咲き、市場でも平成9年頃それまでに見たことのないビオラが出荷されるようになりました。ナデシコの種間雑種であるテルスターを見て、庭の四季咲きタカネナデシコと交配したらどうなるだろうかという思いが芽生え、平成10年頃から育種を始めました。

育種については、大学でさらっと総論を学び、父の行うシクラメンの自家採種を見ていた程度でした。しかし、以前偶然に育種家の人から聞いた話を思い出し、自分でもできるのではないかと感じ、市場流通している品種を集め、自家の雑種との交配を行いました。交配親品種は、全て自園のものです。育成者の会で講演された福岡の小林泰生さんと佐藤顧問にアドバイスをいただき、それらしきものを選んできました。その結果、良いなと思ったものを残して交配し、がむしゃらに表現のバラエティを増やすことに重点を置いて選抜を進めました。育種目標は一言では言えません。パンジーは元々ガーデン用のものですが、食卓やテーブルの上で、寄せ植えを、繊細な表現を、近くで鑑賞してもらいたいというのが私の思いでした。それで、花色も濃い、淡いにかかわらず、変わった色でも雰囲気があってきれいに見えるものを目指し、草型はコンパクトで花が抜き出るような位置に咲くものを選びました。ナデシコについては、四季咲き高嶺ナデシコを栽培していて、異様に種子が採れるので蒔いていたのですが、戻し交配と知らずに元株と交配を行なっていて、「かおりKAHORI」の実生品種で花持ちが良く花茎の長い「かぐや姫」を2005年に、より花持ちの良い「桃山単衣」を2007年に登録することができました。

私が栽培するパンジー、ビオラなどは他殖性で採種するので均一性が低く、固定種で品種登録を取ることが困難です。それもあり、「フレアーブルー」、「花まつり」、「小桜」、「マイファニープリンセス」、「ファアリープリンセス」などのパンジーやビオラの品種は、

パンジー　「フレアーブルー」



パンジー　「マイファニープリンセス」

商標登録を受けています。栄養繁殖できるものは品種登録し、種子系のもので使われたくない名称については、「商標登録」を行っています。

パンジーは開花株から次世代の種子を取るのですが、個体毎の微妙な違いがあり、好ましいペアを探すのに受粉しない株が大きくなってきたり、花持ちが良くても株が剛直になり過ぎて繊細さが足りなくなったりするので、かなりの生産量がないと両親を選抜できません。労力に限りがある個人育種では、品種が増え過ぎることも負担となります。また、最初に開花した株が良いとは限らないので、しっかり見ていかないと途中で花が止まったり、後から咲く花形が変わっていたりします。それでも、早めに選抜しないと管理に追われ、交配が遅れれば採種量が減ってしまうことから、これまでの経験から捨てる目、ピックアップする目の両方を持つことが必要だと感じています。

私の作った品種は、「横浜セレクション」のロゴをつけて主に市場や園芸店等に販売しています。さらに、教室を持ったり、ツイッターやインスタグラム、フェイスブック等で寄せ植えの講師をしている方に提供したり、パンジー・ビオラ展等を利用して宣伝や普及に努

めています。

家庭園芸普及協会主催のフラワー＆ガーデンショウでのジャパンフラワーセレクションに初めて出品したのは、2003 年だったと思います。我が家の四季咲きナデシコと「かぐや姫」を展示したと記憶しています。パンジーとビオラは、登録品種にもなっていないと展示・審査を断られましたが、会場で佐藤顧問から「流通させているものだから出していいのでは」と言っていただき、出品できたのです。本当にうれしく、感謝しております。その後、私の育成品種は、2006 年にナデシコ「桃山単衣」がジャパンデザイン特別賞、2008 年にビオラ「マイファニープリンセス」が一般来場者の人気投票第 1 位、2009 年に「マイファニープリンセスイエロー」がカラークリエイト賞となるなど、数々の賞を受賞することができました。

ここまで来るには、試練もありました。2010 年頃にはフザリウム立ち枯れ病、その後黒腐れ病（シャララエレガンス）に 2 度襲われ、病株を廃棄し、薬剤の散布を行いましたが防げず、全てを廃棄しました。温室を太陽熱消毒、土壌はバスアミド、クロールピクリンで毎年消毒をしていましたが、未熟堆肥などから生じる黒根病が出てから、播種用土や鉢上げ用土などの清潔な培養土を購入し、その後の発病を抑えることができました。

私の園の種子を生産してくれる方々がいること、作ってくれる方が私が手掛け・生まれてきてくれた花達を気に入ってくれることは、育成者として最高の幸せです。新しいものを出すことだけでなく、長く使ってくれることもうれしく思います。

今後はパンジー、ビオラの生産量を少し減らして、他の植物にも目を向けようと思うのですが、種蒔きするとかなりの量となって、その管理のために他の作業ができません。ナデシコの交配もしたのですが、種子も蒔けていません。自分の育種に培養をうまく取り入れられないかと思っています。

私は、国の種苗政策を審議する農水省資材審議会種苗部会の委員となって 2 年が経ちます。超がつくような専門家の方々とともに、登録審査基準の特性表の改正や変更等を UPOV 条約に準拠する方向で審議しています。今後は、会の代表として、個人育種を日々行っている会員から品種登録に対する要望等を提案したりすることができればと思っています。

（注釈：パンジーは英名、主にアメリカで使われてきた呼び名で、欧州では花の大小にかかわらず学名のビオラが主に用いられてきた、大輪をパンジー、小輪をビオラと使い分ける呼び名もわが国では定着していたが、我が国ではアマチュアの育種も盛んで、両者の区別性がなくなってきたので、ここではパンジーとして掲載した。）

活動暦

5/27　かわら版「育種の波動」第8号発行
5/27　青果育種研究会総会
6/15　PVP コンソーシアム運営委員会
6/29　植物品種保護戦略フォーラム企画委員会、講演会
7/19　流通品種データベースワーキンググループ
7/21　ジャパンフラワーセレクション理事会
7/30　全国花き輸出拡大協議会総会

伝言板

○オリンピックが始まり、日本選手はこれまでにないメダルを獲得していますが、コロナ患者は感染の強いといわれるデルタ株の影響か、東京で１日５千人を超えるまで急増しています。また、この夏は新潟で39度を超えるなど、全国各地で猛暑を記録しています。皆さんはお変わりありませんでしょうか。不要な外出や密を避ける、水分をこまめに取るなど、我々一人一人が防止対策を取り、会からコロナ感染者や熱中症を出さないようにしたいと思っています。

○春の講演会はコロナの影響から中止となりましたが、秋の講演会が10月20日にスモモの育種に取り組み、2月の総会で育種功労賞を受賞した山形県大江町の渡辺誠一さんに講師をお願いして実施することになりました。山陽新聞の記事で林副会長は「育種のコスト回収ができない現状の中で、果樹は農産物の販売実績に応じた対価を取る仕組みにしたい。」と訴えていますが、渡辺さんは果樹の育種家の願いであるその許諾料の徴収を実現していることから、その取り組みを聞きたいとの要望があり、講師にお願いしました。オンラインで行い、会員以外の方の参加も可能ですので、知人等を誘っての参加をお願いいたします。

○かわら版7号に続き、今号でも2人の新入会員の紹介記事を載せることができました。入会された吉池貞蔵さんは、岩手県のリンドウ育成、産地育成に取り組まれ、90歳の現在もバラを育種し、多くの賞を受賞されています。事務局が送付したこのかわら版の育種の体験記事等を読まれて、こんな情報が得られるならと入会を希望されました。上智大学理工学部の学生である木村さんは、育種の仕事がしたいと柑橘の交配等を行っていて、志を同じくする育種家と交流したいとの希望を持って思っていた中、当会の HP を見て入会したいと事務局にメールをされました。7号で紹介した新入会者の一人も、HP を見て入会したいと事務局に電話されました。初代会長の安藤さんは、このことを「自分たちの時には考えられなかったことだ」と言われました。これらの

事実から、今後当会としてSNS等を活用して、大いに情報発信に努めていきたいと思います。皆さんからも、情報発信に対するアイデアや意見、発信したらと思う情報等があれば、どんなことでも結構ですので、事務局にお寄せ下さいますようお願いいたします。

□　□今号では、長谷川さん、渡部さん、笈川さんの3名の育種の取組みを紹介させていただきましたが、いかがでしたでしょうか。これまでに紹介した会員は既に20名程になっており、育種に粘り強く取り組む皆さんの姿を、今後会員以外の多くの方に紹介したいと考えています。

このかわら版についての意見、情報提供、感想、問合せ先は次のとおりです。

全国新品種育成者の会事務局
岩澤　弘道

０９０－４０５９－１０９６
Fax　０３－３６９１－２８１８
Ｅメール　iwa.hinsyudebyu.512@gmail.com